

目的 子供は自らの内的欲求から、遊びを通して繰り返して行動し、急速に神経系が発達する過程で、時間的空間的パターンを神経回路に組み込んでゆく。この感覚統合を通して巧緻性を伴い衣服の着脱行動が確立する。著者は未熟な幼児の発達を助長するしつけ服の検討を考えている。そこで本報では、「体性感覚野が巧緻動作の運動段階に関与している」とする岩村の見解をもとに、ボタン条件の設定を目的として、幼児のボタンのかけはずし行動を観察する着用実験を試みた。猪又らの報告では、縦穴が扱い易いとされている。予備実験で検討したところ、腹囲線より下部では横穴が良い例もわずか見られるが、全体では縦穴が良好の傾向を見ているので縦穴のボタンホールで実験を行うことにした。

方法 実験は1991年3月～12月に保育園児46名を被験者として実施した。前開き上衣にボタンを4個つけ、そのかけはずし動作を8ミリビデオカメラで撮影した。同時にストップウォッチで動作開始から終了までの時間測定を行った。ボタンのサイズ(3水準)、形状(2水準)、色(2水準)、ボタンホールサイズ(2水準)を要因としてとりあげ、かけはずしの所要時間について分散分析法により検討した。

結果 1. ボタンかけの平均所要時間は、年長5歳以上では15.00秒、年少2歳～4歳では79.49秒、はずす時間は年長では10.36秒、年少では33.52秒であった。いずれも年少の標準偏差が著しく大きく、ボタンのかけはずし動作が未熟で発達過程にあることを示している。2. ボタンのサイズ以外の要因すなわち、形状、色、ボタンホールサイズでは有意差が認められた。3. 年長では体性感覚野が関与し、目視せずにかかけはずしができる。